プログラム・ノート

片桐卓也

今年のチェンバーミュージック・ガーデンのフィナーレには、ロマン派から現代までの室内楽曲が集められたが、いずれも作曲された時代を代表し、その作曲家の個性を強く感じさせてくれる作品が集まった。編成もかなり変化に富む。そして演奏家のチーム分けも、このフィナーレで初共演となる組み合わせが多いところが興味深い。それは聴き手にとっても一期一会の出会いとなるだろう。

ドヴォルジャーク：ピアノ五重奏曲第2番 イ長調 作品81 より 第1楽章

ボヘミアの作曲家アントニン・ドヴォルジャーク（1841～1904）は若い頃、とある楽団のヴィオラ奏者として生活をしていた時期があった。ドヴォルジャークには室内楽の傑作が多いが、その若い時期の経験が作曲に活かされていたのかもしれない。彼はオーストリア政府の国家奨学金を受け、その審査の過程でブラームスが彼の才能に注目し、世の中に出るチャンスを得た。

ドヴォルジャークの室内楽の傑作のひとつとして有名なピアノ五重奏曲第2番は円熟期と言える1887年に作曲され、翌年プラハで初演された。ここでは第1楽章アレグロ、マ・ノン・タントをお聴き頂く。ピアノのさざ波のような音型の上で、少し悲しげに歌うチェロのメロディで始まり、その後5人全員で激しい情熱を秘めたメロディを展開する。

ちなみにドヴォルジャークはもう1曲、ピアノ五重奏曲を書いているが、こちらは初期の作品で、現在はほとんど演奏されないので、ドヴォルジャークの「ピアノ・クインテット」と言えば一般的にはこの第2番を指す。

グラズノフ：5つのノヴェレッテ 作品15 より
第2曲「東洋風に」、第5曲「ハンガリー風に」

19世紀末から20世紀の初頭のロシアで活躍したアレクサンドル・グラズノフ（1865～1936）はバラキレフなどの先輩作曲家たちに若くして才能を認められ、16歳の時にバラキレフの指揮によって交響曲第1番が初演されるなど、注目を集める存在だった。ドイツに出かけた際には、その第1番はリストの助力によってワイマールでも演奏された。

ただ、指揮者としての才能はあまり無かったようで、歴史的に有名なラフマニノフ（今年生誕150周年）の交響曲第1番初演の大失敗（1897年）という“事件”を引き起こす

ことにもなった。しかし、サンクトペテルブルク音楽院の院長として活動し、音楽観は保守的ながら、ショスタコーヴィチの才能を見出し、その成長を助けるなど、若い音楽家への支援を続けた。グラズノフの作品ではバレエ音楽『ライモンダ』や第4番以降の交響曲など、現在も触れる機会があるが、彼の作品1は弦楽四重奏曲であり、7曲の弦楽四重奏曲の他、室内楽作品も多い。

この弦楽四重奏のためのノヴェレッテは、1886年に書かれた民族舞踊をモチーフにした個性的な5つの曲からなる小品集だ。「ノヴェレッテ」とはドイツ語で短編小説を意味する言葉で、ロマン派の小品集によく付けられている。ここでは第2曲「オリエンタレ（東洋風に）」と第5曲「アル・ウンガレーゼ（ハンガリー風に）」の2曲が演奏される。

ピアソラ（ヴェフマネン 編曲）：『タンゴの歴史』より 第1楽章、第3楽章

アルゼンチン・タンゴの鬼才と呼ばれて活躍したアストル・ピアソラ（1921～92）は、若い頃にはクラシック音楽の作曲を試み、同郷の作曲家ヒナステラに師事したり、パリで名伯楽ナディア・ブーランジェのクラスで学んだりしたこともあった。しかし、自分の本当にやりたい音楽はタンゴだと思い直し、アルゼンチンを中心に世界各地でタンゴの革命に取り組んだ。

ピアソラはタンゴ音楽をベースにしながら、クラシック的な作品も書いており、その中で最も演奏機会の多いと思われるのが『タンゴの歴史』だ。もともとはマルク・グローウェルズ（フルート）とギー・ルコフスキー（ギター）というふたりのベルギー人アーティストの委嘱により書かれ、1986年に出版された。タンゴが音楽として誕生し、変化してきた歴史を辿るというコンセプトの全4楽章からなり、まず第1楽章「ボルデル1900」はタンゴが始まった時代を描く（ボルデルは日本では売春宿と訳される）。第3楽章「ナイトクラブ1960」はピアソラなど若い才能によって、タンゴの音楽が新しい装いをまとうようになった時代を描いた楽章。

オリジナルの編成以外でも様々な楽器によって演奏されている人気曲だが、今回はファゴットとハープというかなりレアな組み合わせによる演奏に注目したい。

ショスタコーヴィチ：ピアノ五重奏曲 ト短調 作品57 より
第1楽章、第2楽章、第3楽章

ソヴィエト・ロシアの誕生した時代に青年期を過ごしたドミトリー・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、ロシア共産党の支配する時代を生き、さまざまな文化政策に翻弄

された。政府による検閲をかいくぐりながら困難な創作活動に取り組まなければならなかった。

そのショスタコーヴィチの室内楽は、実は彼が本当の自分をさらけ出すことができた唯一のジャンルとも言われており、特に弦楽四重奏曲が有名である。その他ではこのピアノ五重奏曲が彼の室内楽における代表作とされている。作曲は1940年、同年11月にベートーヴェン弦楽四重奏団と作曲者自身のピアノによって、モスクワで初演され、翌年スターリン賞を受賞した。注意したいのは、この作品がまさに独ソ戦前夜の不穏な情勢のなかで書かれたことである。

全5楽章の作品で、ここではその第1楽章から第3楽章までをお聴き頂く。第1楽章はプレリュード(レント)、第2楽章はフーガ(アダージョ)、第3楽章はスケルツォ(アレグレット)。その後もインテルメッツォ、フィナーレと続くのだが、バロック期から古典派、ロマン派の時代をさまようような音楽形式の流れを、表面上は追求しているのが興味深い。

シューマン:ピアノ五重奏曲 変ホ長調 作品44 より
第1楽章、第2楽章、第4楽章

19世紀ドイツで活躍したロベルト・シューマン(1810～56)は室内楽の傑作を数多く書いた。中でも彼の「室内楽の年」と呼ばれる1842年に書かれたピアノ五重奏曲はロマン派を通しての室内楽の傑作とも言われている。

裁判の末、クララ・ヴィークとの結婚をシューマンが勝ち取ったのは1840年のこと。9月にふたりはシェーネフェルト(ライプツィヒ近郊)で結婚式をあげた。1841年(交響曲の年)に交響曲第1番が完成、そして1842年には3つの弦楽四重奏曲、このピアノ五重奏曲などが書かれた。

ピアノの豊かな表現力をこれほど感じさせる室内楽も珍しい。4つの楽章から構成されるが、ここでは第1、第2、第4楽章を演奏する。第1楽章はアレグロ・ブリランテ。まさに「ブリランテ」な華のある音楽とロマンティックな情熱が結合された楽章。第2楽章は一転してハ短調の「イン・モード・ドゥナ・マルチア」と指示された「葬送行進曲」風の音楽だが、中間部では穏やかで、優しい回想とも呼べるシーンが登場する。第4楽章はアレグロ・マ・ノン・トロッポ。変ホ長調とされるが、はじめはト短調～変ホ長調～ニ短調～変ロ長調と不安定に調が揺れ動き、次第に音楽が高まって、最後は変ホ長調のコーダでダイナミックに終わる。

メンデルスゾーン：弦楽八重奏曲 変ホ長調 作品20 より 第3楽章、第4楽章

シューマンと並んで19世紀半ばのドイツ作曲界をリードしたのがフェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)である。裕福な家庭に生まれ、英才教育を受けたことが有名で、10代からその芸術的な才能を発揮した。最初に出版された作品はピアノ四重奏曲第1番で、13歳の時の作曲だった。

各ジャンルに名曲の多いメンデルスゾーンだが、この弦楽八重奏曲(オクテット)も実演に接する機会が比較的多い。作曲は1825年で、作曲家が16歳の時。単なる八重奏ではなく、弦楽四重奏団がふたつ共存して演奏するというユニークなアイディアによる作品だ。第3楽章はスケルツォ：アレグロ・レジェリッシモという指示が書かれる。レジェーロ(イタリア語)の最上級だから、あえて訳せば「可能な限り軽やかに」となるだろうか。第4楽章はプレスト。急速なチェロのパッセージで始まり、それをカノンのように各パートが受け継いで行く。そしてヴァイオリンによって出される力強い主題を中心に展開されていくが、各パートの出入りを全部チェックしながら聴くのはなかなか大変。注目するパートやアーティストに集中して聴くと面白いかもしれない。

ブラームス：弦楽六重奏曲第1番 変ロ長調 作品18 より 第2楽章、第4楽章

シューマン、メンデルスゾーンの後継者として19世紀半ば以降に活躍したのがヨハネス・ブラームス(1833～97)。ハンブルク出身の彼は1853年にデュッセルドルフでシューマンと出会い、より強く作曲への意欲を持つようになった。シューマンとその妻クララとの出会い、シューマンの死などを経験したブラームスが大作、ピアノ協奏曲第1番を書き上げたのは1858年で、その後、この弦楽六重奏曲第1番に取り組んだ。通常の弦楽四重奏にヴィオラとチェロをさらに1本ずつ加え、より豊かな響きを意図している。

第2楽章アンダンテ、マ・モデラートは変奏曲。力強さと同時に強い憧れを含む音楽は、フランスの映画監督ルイ・マルの作品『恋人たち』に使われたことでも知られる。最後の第4楽章はロンドで、ポコ・アレグレット・エ・グラツィオーソと指示されている。ダイナミックで急速な音楽ではなく、優雅な印象を残す軽やかなフィナーレに仕立てている。

（かたぎり たくや・音楽ライター）